

口頭発表「子どもと親が実感した継続飼育の学び ～ 6 年間のモルモット飼育を通して～」

加藤直子^{※1}

上野花珠 源関遥 重松有 富田沙希 西川ひかり 根本惟 秦英美 引地祥悟
前田大慶 松本涼 丸橋勇輝 横田未来^{※2}



ある子のホームステイ先で、マシュは死を迎えた。獣医さんに報告すると、「ぎりぎりまで食欲があったところを見ると、しこりの痛みや苦しみはなかったはず。子どもたちみんなに育ててもらって、幸せに息を引き取ったと思いますよ。」という言葉をいただき、ホームステイ先の親子にとっても、安心できる言葉であった。

学校では、4年生の担任が、子どもたちから思いを聞きながら、お別れの会を進めてくれた。

2年後の6年生の時に、もう1匹のチョコが死を迎えた。この時には、子どもたちが中心となって、獣医さんや元担任、自分たちよりも前に飼育していた先輩に連絡をする姿があった。同じく子どもたちが中心となって、学年全員でお別れの会をすることになった。

1匹目のマシュの死のときには、とまどったり、死を受け入れることに時間がかかったりしてしまった子どもたちであったが、2匹目のチョコの死のときには、自分たちができることを考え行動し、モルモットへの愛情と感謝、自分たちの成長をおおいに感じられる姿があった。



1 はじめに

子どもたちは、平成 24 年 4 月に入学し、モルモット 2 匹のチョコとマシュを飼育し始める。クラス替え後の 3 年生からは、3 クラスの教室を移動しながら教室内飼育を継続した。

生活科においては、いろいろな手立てを考え、モルモットへの愛着を高めたり、モルモットを飼育することを通して成長した自分や友達に気付き伝え合ったりする活動を行ってきた。

子どもたちが 4 年生の時に、モルモットのマシュが死を迎えた。死を迎える数か月前から、腕の付け根あたりにしこりができ、だんだん大きくなっていて、獣医さんに診てもらっていた。

2 子どもたちが実感した継続飼育の学び

12 人の子どもたちが、継続飼育の学びについて発表した。研究大会当日の子どもたちの発表内容を以下に示す。

私がチョコマシュを最後まで育てて学んだことは、よく見てあげることが大切ということです。そうすることで、その子の性格や好きな食べ物を分かってあげられたり変化に気づいたりするからです。

次にチョコマシュを育てることを通して、

書式変更: フォント: (英) MS ゴシック, (日) MS ゴシック

書式変更: フォント: (英) MS ゴシック, (日) MS ゴシック

自分たちで考えて行動できたことはチョコが死んでしまう直前、具合が悪そうだからみんなでどうすればいいのか考えました。お水を口元に持っていったり、だっこしたりしたのがすごく印象に残っています。

これらの経験から、コミュニケーションをとり相手のことをよく知ることによって、たくさんいいところを見つけることができると分かりました。人間関係にも同じことが言えるのではないかと感じました。

低学年の最初の頃は学校で飼っているモルモット、チョコとマシュが週末家に連れて帰れるということだけで嬉しかったです。エサの準備も掃除もお母さんがやっているのを見ていただけでした。しかしいつからかご飯も掃除も自分でやるようにしました。

他のモルモットもそうなのか分かりませんが、チョコとマシュはお腹がすくと鳴きます。

そのうち周りにあるものを食べ始めます。なぜならかわいいだけじゃ飼えない、生きていられない、掃除もしないとチョコとマシュの体は汚れて病気になるかも。それが分かるようになったからです。

それからは自分でちゃんとやるようにしようと思いました。

私の家には、犬がいるのでチョコマシュを連れて帰るときは、犬がやきもちをやいたりチョコマシュのハウスをひっかいたりして遊びたいような様子をするのでいつも気をつかいました。学校でもいろんな子どもたちにだっこされたり、ホームステイの家庭環境も犬ネコ小さな子どもがいたりなどで、チョコマシュもストレスを感じたりするのではないかと心配になることもありました。

でも、犬も人になでられたりだっこされたりすることで安らぐことがあるようなのでみんなにかわいがられてこんなに長生きしてくれたのだと思います。

私はチョコマシュを最後まで育てて、後悔しないような接し方をします。ということ、生き物の寿命の短さを学びました。

私はチョコとマシュを育てて、少し飼い

方に悔いが残っています。高学年になるにつれ、周りの人に飼育を任せきりにしてしまっていたということです。私はチョコとマシュのことが好きでしたが、飼っている。ではなく飼っているつもり。になってしまっていて、私はチョコとマシュをもっといい環境にいさせてあげることが出来たのではないかと、チョコとマシュが亡くなってからとても考えさせられました。

また、それと同時に命の短さを感じるものが出来ました。この先どのくらい一緒に居られるのか、考えもせず私は飼育してきました。生き物を飼う上で、別れないという選択肢がなく、人間の一生と生き物の一生は違うと覚悟することが出来ました。生き物の短い命の扱い方を学ばせてくれる2匹の命でした。

私がチョコマシュを育てて学んだことはやはり命の大切さです。チョコマシュが病気になるたら心配して、お薬をあげるのに校門が開く前に学校を開けてもらってお薬をあげたり、ホームステイをするときなるべく揺らさないように丁寧に家まで持って帰ったり、ダンボールハウスを作るとき歩きにくい所を考えてそこを歩きやすくなるように工夫して作ったりとチョコマシュのために色々なことをしてきました。チョコマシュの命が大切だからこのような行動ができたと思います。

チョコマシュを育てて自分たちで行動出来たことは先程にも少しあげましたが、お薬をあげる時のことです。それは普通の学校の休み時間中にお薬をあげるといろんな人が周りに寄ってきてとてもやりにくかったです。友達と相談して朝早くに学校に来てお薬をあげたらどうかと考えました。そうすれば私達もおくすりをあげやすいし、なによりチョコマシュたちのストレスになりにくいと考えたからです。

このようにお薬を飲まなきゃいけないのもストレスが溜まるのも全部私達と同じだと私はおもいます。だから友達や親だけでなく動物たちにも優しく接することが大切だとおもいます。

僕がチョコマシュを最後まで育てて学んだことは、生き物の命を背負っているということの責任感や一緒にいられる時間が短いということです。なぜかという、チョコマシュのお世話をしてくうちに、自分の行動が大きくチョコマシュへ影響するということを知りました。

例えば、水かえを忘れてしまったり、掃除をする日を明日へのぼしたりしてしまうと、チョコマシュにストレスがかかってしまい、病気になりやすくなってしまいうからです。

チョコマシュが病気になってしまったときは、自分のせいだと思いました。そしてチョコマシュが死んでしまったときは、受け入れられず実感がわかりませんでした。受け入れたくありませんでした。一緒にいられる時間が短いと思いました。

最初は膝に乗せると逃げのように床に降りるチョコマシュでしたが、お世話を続ける中で、鳴き声をあげて甘えてきたり膝に乗せても逃げず「チョココン」と乗っかってきたりと自分のことを覚えてくれたことが嬉しかったです。

また育てていく中で「ペット」「動物」という認識で始めたお世話でしたが、その存在がいることが当たり前になっていった学校生活であり、小学校を振り返ると決して欠けることがない思い出、ピースだと思います。

死んでしまったとき、こんなにも冷たく動かなくなった姿を見て、「死」ということをチョコマシュに対して初めて考えさせられたきっかけになりました。また、平均寿命は5～6年と言われている、この寿命を超え生きたチョコとマシュは力強く愛されていたと思います。そして「ありがとう」を伝えたいと思いました。

チョコマシュを最後まで育てて学んだことは、ずっとやり続けることの難しさを学びました。例えば、えさやりやそうじ、ホームステイ先を毎週決めること、お世話する気持ちなどです。

チョコマシュが死んでしまったときは、

チョコマシュは、1年生のときからずっと一緒に過ごしてきたので、チョコマシュの「死」を考えたことはありませんでした。高学年になって具合が悪くなって、とても心配だったけれど、それでも「死」を考えていませんでした。僕の身近にいる人はみんな元気なので、「死」を想像することが難しかったからだと思います。

マシュが亡くなったとき、動かなくなったマシュを見て、悲しい気持ちはもちろんだけど、初めてもう会えなくなるという不思議でさみしくて、悲しい気持ちになりました。「死」ってこういう気持ちなのかなと思いました。死んだら会えなくなることは当たり前なことだと頭では分かっているけれども、実際にそうなってみると複雑な気持ちでした。

今は、一緒に小学校生活を過ごしてくれて「ありがとう」という気持ちです。

私はチョコマシュの飼育を通じて、生き物は、いつか必ず死ぬときが来るので、生きている間に自分がくい残らないようなお世話をしてくべきだと改めて思いました。

チョコマシュを飼い始めてすぐの頃、みんなそれぞれできないことがあって、私の場合は、巣箱からチョコマシュを出すことができなかったけれど、お互いにできることを教え合ったり、みんなそれぞれできなかったことを協力して解決したりすることができました。

チョコマシュが死んでしまったときは、悲しかったけれどみんなでお墓を作ったり、命日にはお墓まいりに行ったり、死んでしまってもチョコマシュと一緒に過ごしたことは、忘れることはないし、飼育したこととはとてもいい経験となりました。

チョコマシュは、自分1人で育てていたのではなく、クラスみんなで協力し、お世話の当番なども決めて育てていたので、自分が忙しかったりして、お世話の当番などが苦しかったりする時は、他の人に当番を頼むなど、他の人の力を借りながら、みんな「協力」して育てることができました。進級し、クラス替えをしてクラスがバ

ラバラになっても、それぞれが自主的にお世話やホームステイをすることで、チョコマシュを飼育し続けていくことができました。

チョコマシュが死んでしまった当時、身近な生き物の死というのは、経験のないことで、生き物には寿命があるから、いつかは死んでしまうということは、分かっていたけれど、まさか今日死んでしまうとは思わず、自分がかわいがっていたチョコマシュが突然死んでしまったのは、とてもショックでした。今まで、生き物はいつか死んでしまうということは、わかっていたつもりだったけど、実際に体験して、それを実感しました。そして、モルモットに限らず、どんな生き物でも、それを飼うということは、その命に対して、自分には責任があるのだということをより強く実感しました。

モルモットはクラス替えが2回あったのにもかかわらず、学年全体で話し合っただけで飼育を続けることを決めました。私の中ではそれはとてもすごいことだと思っています。モルモットを何も知らないような子や、初めてこの学校に来た先生もいたはずなのに、それでも、チョコマシュを受け入れてくれたことは感謝してもきれないし、今でも素晴らしいことだと感じます。

チョコは私たちが6年生の2学期頃から少しずつ、具合が悪くなっていきました。マシュが4年生の時に亡くなったこともあり、そろそろかもしれない、とお世話をしながら薄々感じていました。

私がある頃から考えたことは、学年の団結力です。私のクラスでは、モルモットを詳しく知っている人はあまりいませんでした。でも、少しずつクラス内や学年、学校にモルモットのことを発信するようになってからクラスの人たちが、チョコに触れ合ってくれることが増えたのです。他にも、小屋に敷く新聞を持ってきてくれたり、一緒にクローバーを取りに行ってくれたりする人が増えました。10月頃、さらに容態が悪くなり、病院に行く回数が増えました。

薬をあげる時も早朝から学校に入れさせてもらったり、薬の管理を先生にお願いしたり、小屋を覆うタオルケットをみんなに持ってきてもらったりしました。

私の中ではチョコマシュが亡くなる最後の最後まで、学年全体で見守ってあげられたような気がします。

私がチョコマシュを育てていて一番印象深かったのはマシュちゃんが亡くなったことです。私はその時、ホームステイをしていました。マシュは半年前からお腹に大きなしこりがあり通院をしていました。

その日の朝、大好きな野菜をあげたのに食べませんでした。「おかしいな」と思ったけれど、前日に病院で診てもらっていたので大丈夫だろうと信じて出掛けました。でも家に帰ってきたらマシュがいつもよりぐったりとしていたのでだっこしてあげました。いつもだったら抱かせてくれるのにこのときは巣箱に戻ろうとしていました。やっぱりおかしいなと思って、あまり目を離さないようにしていました。すると突然チョコかクワイ——と鳴いてマシュのことをツンツンしていました。私はマシュをだっこしました。今度は力がなくて巣箱に戻ろうともしませんでした。マシュはそのまま私の膝の上で息を引き取りました。

私はもう泣くことしかできませんでした。涙が止まりませんでした。今までの中で一番泣いた日でした。とにかく悲しかったです。

私は悲しみながら思ったことがひとつありました。それはチョコが教えてくれたことです。何年間も一緒にいたら最期もわかるんだと思い、すごいと思っても驚きませんでした。

それから、チョコにもいつかその日がくると思い、後悔がないように一生懸命お世話をして可愛がりました。

チョコは、私たち6年2組の教室にいました。

6年生の10月のある日の3時間目が終わったあとの5分休み、チョコはぐったりしていました。具合が悪そうだったので、

後ろの方の席の子に、「様子見てね」と言いました。2年前にマシュが亡くなったときに、花珠さんが見ていたので、隣のクラスの花珠さん呼びに行き、教室に来てもらって見てもらいました。

花珠さんがだっこしてくれたり、私のひざに置いたりして、みんながチョコのところに集まって、みんなでかわるがわるだっこしました。チョコが動かなくなって、まばたきがゆっくりになって、目が半びらきのままになってしまいました。体も固まった感じで、冷たくなってきたような気がしました。その後も様子を見ていたけど、ずーっとそのままでした。

4時間目が終わり、給食の時間になったら、他のクラスの子たちにも伝えに行き、みんなが2組に集まってきました。

その後、先生にお願いして、学年集会をさせてもらって、チョコが亡くなったときのことを、6年生のみんなにお話しました。そして、チョコをうめに行きました。

マシュがなくなったときは初めてで自分たちで進めることは時間がかかりましたが、チョコがなくなったときは、チョコマシュを看取っていた獣医さんや元担任の加藤先生に報告しないと、と考えることができました。

学年集会も、自分たちで先生にお願いして自分たちで最後まで進めることができました。

3 親が実感した継続飼育の学び

保護者の方にも、継続飼育を通して実感した子どもたちの成長を書いていただいた。

チョコマシュの飼育に関わったことで、単にかわいい小動物の一時のお世話ではなく、5年間の実体験を通じた学びをさせていただいたことは、貴重な経験となったと思います。

言葉の通じないチョコマシュの様子を気かけ、好みや様子に合わせた飼育、飼育ノートに絵入りの日記をつけてクラスメートとの情報交換を通じ、より良い飼育環境を実現しようと努力する姿に子どもたちの

成長を感じました。

チョコマシュが老いて弱っていく中、懸命に世話をし少しでも長生きさせてあげようとしていたことやマシュが亡くなって悲しんだこと、1匹になったチョコも最後まで見届けたことは、命あるものを大切に育心する心を育ませてもらったと感じています。

マシュが亡くなって初めてチョコだけのホームステイをすることになり、学校からチョコを連れ帰ってくることになりました。チョコを移動用に使用している木箱に入れ、持ち上げるとあまりに軽く感じられて、とても驚きました。マシュがいなくなった寂しさと共に、重さでリアルにマシュが亡くなったことを実感してしまうできごとでした。

チョコとマシュを初めてホームステイさせる時、私はその体の大きさもあり、ぞんざいに飼えるわけではないのに大丈夫かなと心配でした。しかし、子どもは普段から教室と一緒に過ごしているからか、その心配をよそに「抱っこの仕方はこうだよ」とか、「いろいろな野菜をあげてみてもけっこう好き嫌いがあるんだよ」と色々と教えてくれました。

ただ普段と違って家で一緒に過ごすことで、朝起きて顔を見せると、「くう～ん、くう～」と鳴き、「お腹がすいているのかな」と自分で野菜を持って行ったり、出かける時も「暑くないかな」とみんなでホームステイした際の情報をメモしたノートをめくって「凍らせたペットボトルをいれたらいいのかも」と準備をしたりしていました。

親も答えが分からない分、相手を思いやって自主的に行動することができたのではないかと思います。チョコとマシュを通して、相手の気持ちを想像し、継続して関わっていく大切さを自然と学ぶことができたことと感謝しています。

飼育し始めはただ可愛がるだけだったのが健康状態を気かけたりチョコマシュの気持ちを考えたりすることができるようになりました。

飼育を始めて2年経った頃、飼育して

いることが当たり前になってしまい関わり方がおざなりになったことがきっかけで、改めて命ときちんと向き合うことを考える良いきっかけになりましたし、クラスの垣根を超えて関わる基盤ができたように思います。

マシュの具合が悪く血尿がでていた時はかなり気をつけて尿の量や色を観察しました。寝てばかりいる時間が増えてとても心配になりました。薬が効いて血尿が治った時は心底ホッとしましたが学校へ戻した後も大丈夫か心配でした。

2匹が死んでしまった時は、淡々と受け止め家で泣いたり落ち込んだりはしていませんでした。学校では友達と悲しみを共有して少しずつ消化していったのかと思います。

チョコマシュがいなくなった後もみんなが自発的にお墓の手入れをしていました。中学2年になった今なかなかそういった時間もとれない中、先日参加した「ものづくりワークショップ」で、チョコマシュのお墓にたてる看板を作っていたのを見て、この子達の中ではチョコマシュは消えていないんだと分かり少し嬉しかったです。

チョコマシュと出会ったのは娘が1年生だったので、小さなふわふわモコモコの生き物が可愛くて仕方がない様子でした。

年齢を重ねるごとに小さなふわふわのモコモコのチョコマシュだけどぬいぐるみじゃなくて生きている…だからちんとお世話をしなくてはという感覚に変わっていきました。

私の中でチョコマシュのホームステイの思い出は、飼っていた飼い犬(ルーク)との関係です。性格が大人しく優しいルークなのでチョコマシュとも大丈夫とと思っていましたが、初めて会わせた時は家族みんなドキドキしたのを覚えています。

チョコマシュはルークを気にすることなく、パプリカをパクパク食べていて、そしてそのうちルークも横と一緒に食べていました。ホームステイに来るたびに恒例の光景になっていました。

全く違う種類の生き物でしかも月に一度来るか来ないかの関係で、この信頼関係はなんなんだろうと今考えても不思議な感じでした。

生き物を飼うということ、みんなで育てる意味。悲しい別れもみんなとだから乗り越えることができたと思います。

チョコとマシュは、1年3組にいました。お世話するのは、クラスのみんな。学校がお休みの日は、ホームステイします。我が家にホームステイに来て2歳の次女が大喜びしてなでました。その手で自分の目をこすりました。顔をさわりました。大変です。目が充血して、顔が痒くなりました。本人も家族も驚きました。アレルギーです。それから、ホームステイに来て最初にやる事は、モルシャン(シャンプー)です。これで、次女のアレルギーがだいぶ軽くなりました。次女は、自分で工夫してチョコマシュのお世話を楽しみました。チョコマシュを触った後は、手を洗うなどです。チモシー(牧草)や野菜をあげる、このくらいで充分満足です。

我が家には、チョコマシュが亡くなるまで何回もホームステイにきました。最初は、可愛がりたい気持ちが強かったけれど、何回もホームステイしている内にチョコマシュの様子から求めている事に気付くようになりました。これは、相手意識です。コミュニケーションに大切な相手意識をチョコマシュのホームステイで培えました。

まさか我が家でマシュが亡くなるとは。動かなくなったマシュを抱きながら、ただただ泣きじゃくる娘を見ながら、何と声を掛けていいのか…。

そんな時に友達のお母様が「マシュは最後にはなみちゃんの所を選んでくれたんだね」とメールをくれました。その言葉を聞き私の気持ちもスーッと軽くなり、娘も自分を責めることなく、前向きにマシュちゃんの死を受け入れることができたように思います。自分だけが見送ることができたと。

入学したら、そこにいたチョコマシュ。「今週末はホームステイ先決まっている

の？」子ども達に任せているはずが、つい口癖に。そんな口癖もマシュの死を境になくなりました。チョコの様子がおかしいと自分達で声を掛け合い「今週末〇〇ちゃんがホームステイで病院連れて行ってってくれるって」そんな話を聞くようになりました。子ども達なりにチョコちゃんと一緒に過ごせるのはあと少し、できることをしようと思っていたのだと思います。

そしてチョコの最期を迎えました。みんなが順番に抱っこをして見送ったと、学校から帰ってきた娘から聞きました。加藤先生に知らせ、獣医さんにお礼を伝え、お別れ集会…最後にしてあげられる事を考え送り出していました。チョコの旅立ち、悲しいけれど出来るだけのことはした、思い残すことはない…そんな風に感じられました。

チョコマシュ（相手）の気持ちになって考えることができる優しい子どもたちに成長したと思います。入学した時から常に一緒に過ごし、チョコマシュと一緒に成長することができました。子どもたちの自主性などが成長だと思います。動物を飼育することは子どもたちの成長過程において、とてもいいことだと思います。

チョコを抱っこしていた時に洋服におし

っこをされ、モルモットの仲間としてみとめられたとすごくうれしそうにしていました。

チョコマシュという身近な存在の死を子どもたちなりにきちんと受け止めていました。命の大切さをチョコマシュを通して感じていたと思います。

4 終わりに ～発表を終えて～

教師が実践を発表することはたくさんある。私自身も以前に、本研究大会で発表させていただいた。その実践時の子どもたちが大きくなって、客観的に自分たちの成長を振り返り、一緒に発表するという事は、なかなかできる経験ではない。貴重な経験となった。

子どもたちと一緒にステージに立っていると、子どもたちの発表が進むにつれ、会場の方々が子どもたちの声に引き寄せられている雰囲気を実感した。それだけ、子どもたちのリアルな声は、多くの方の心を動かしたように思う。

同じ子どもたちが6年間も継続飼育することに出会うのは、もう二度とないと感じる。それだけ、いろいろな偶然や思いが重なりできた実践なのだと思う。

※1 前横浜国立大学附属鎌倉小学校

※2 横浜国立大学附属鎌倉小学校卒業生